



Data

監督・脚本：コラリー・ファルジャ
出演：マチルダ・ルッツ/ケヴィン・ヤンセンス/ヴァンサン・コロンプ/ギョーム・ブシェド

■ショートコメント■

◆フランス人の女流監督コラリー・ファルジャが、ハリウッドデビューしたイタリア人のモデル出身の美女マチルダ・ルッツを起用し、大胆な「レイプ・リベンジもの」に挑戦！舞台は、砂漠地帯にポツンと一戸だけ建っている豪華な別荘。映画冒頭は、別荘内を大胆な下着姿で歩き回るジェニファー（マチルダ・ルッツ）と、妻子持ちの男リチャード（ケヴィン・ヤンセンス）との不倫風景が映し出される。

ところが、その翌朝、ほとんど裸状態のジェニファーの目の前に突然、ガラス越しながら銃を肩にした2人の男、スタン（ヴァンサン・コロンプ）とディミトリ（ギョーム・ブシェド）の姿が映ったからビックリ。リチャードとスタン、ディミトリの3人は毎年ここで行われる“狩り”を楽しんでいるのだが、その参加時間にちょっとしたタイミングのズレがあったらしい。

てなわけで、その夜、ジェニファーと3人の男たちは乱痴気パーティーを楽しんだが、翌朝リチャードは外出、ディミトリは二日酔いでダウン。そんな中、性的欲望の塊となったスタンがついにジェニファーに対して・・・。

◆本作のチラシには、「リベンジ」「美しく、残酷に、「ぶっ殺す。」の文字が躍り、「各国映画祭のド肝を抜いた、《美しすぎる復讐の女神》降臨！！」と書かれている。また、その中心には、血と泥にまみれた美女が重そうな銃を抱え、こちらを狙っているが、さて本作はどんな映画？

本作は、コラリー・ファルジャ監督が自ら脚本を書いた“密室もの”。しかも、登場人物は、事実上ジェニファーと男3人の4人だけ。そして、腰にナイフを付けて銃を持ち、“女ランボー”状態の扮装で3人の男たちへのリベンジを始める後半からは、ジェニファーのセリフはゼロになる。前半の下着姿のジェニファーも色っぽいが、後半からの野性的なジェニファーの姿もグッド！いかにそれを魅力的に見せるかが本作の演出のポイントになる。

もっとも、本作では、それ以上に①ジェニファーがスタンにレイプされる物語、②3人

の男に追い詰められたジェニファーをなぜかリチャードが崖から突き落とし、ジェニファーの身体が串刺し状態になってしまう物語、③串刺し状態になったジェニファーが女ランボーばりの行動力で脱出した上、洞窟の中で強烈なドラッグの助けを借りて自力で“手術”をし、身体を回復させていく物語、等をスリングに積み重ねた上で、満を持した後半のリベンジ劇に本筋を移していく面白さがそれ以上のポイントになるので、それに注目！

◆人間はどの程度出血したら死亡するの？医学的にそれはハッキリしているはずだが、本作のクライマックスは、スタンもディミトリもジェニファーに殺される中で、1人別荘に戻ったリチャードの身体に、ガラス越しながらジェニファーが銃弾をぶち込んだところから始まる。リチャードは即死こそ免れたものの、その後大量に出血。それでもリチャードは別荘の中を逃げ回り、ジェニファーはそれを追うが、もちろん万全の注意が必要だ。下手すると、あっと驚く大逆転も！廊下には大量のリチャードの血が流れているから、それで足がすべると・・・。

ロシアで開催された2018年FIFAワールドカップで、1点差のビハインドがありながらあえて攻撃せず、パス回しによって時間の経過を待った、対ポーランド戦の日本チームのように、リチャードの死亡を“他力本願”に賭けるなら、ジェニファーは別荘の外で時間がたつのを待てばいいのだが、あえてリチャードへのとどめを目指したジェニファーは・・・？

◆スウェーデンの女性監督ササンネ・ビア監督は極端なクローズアップ撮影が1つの特徴だが、本作が長編映画デビュー作となるコラリー・ファルジャ監督もそれは同じだ。また、チラシには次のように書かれているが、まさにその通り。すなわち、

レイプ、人間狩り、というおおよそ女性監督に似つかわしくないテーマに果敢に挑み、男性監督でも尻込みしそうな血みどろのバイオレンス演出を披露。原色を基調にした鮮やかな色彩感覚、スタイリッシュな画面構成、男どもを倒してゆくヒロインのカタルシス、といった女性ならではの視点やセンスも存分に発揮。“男目線”だった“リベンジ・スリラー”ジャンルに新風を吹き込む、異色作を作り上げた。

コラリー・ファルジャ監督が最後までこだわったビジュアル美は完璧。その上、クエンティン・タランティーノ監督ばりの“ケレン味”もタップリで、自らの身体に自ら行う手術シーンでは、私は思わず目をそむけてしまった。女流監督コラリー・ファルジャ監督の演出力と脚本力はなかなかのものだ。

2018（平成30）年7月10日記